

# 日本文化の発信と普及のための連携 —ジャパン・ハウス サンパウロの試み—

アンジェラ・ヒラタ

2017年5月、サンパウロ市内の文化施設が集中する目抜き通りであるパウリスタ大通りに「ジャパン・ハウス サンパウロ」が開館、日本はブラジルとの長年の歴史の新たなページをめくりました。

ジャパン・ハウス サンパウロは「コンテンツポラリー・ジャパン」を発信するための日本政府の取り組みであり、様々なもの・人・ストーリーを通じて芸術、文化、文学、技術革新、ロボット工学、モビリティ、農業、健康、食文化、ビジネス等、伝統とルーツを尊重しながら、多様な視点から現代の日本の魅力を発信しています。ジャパン・ハウス サンパウロはふれあいの場となることを目指し、日本とブラジルの架け橋となり、その絆を深めていくことを一つの目的として掲げています。



ジャパン・ハウス サンパウロ外観（写真はすべて JAPAN HOUSE SÃO PAULO 提供）

ジャパン・ハウスは日本国政府が戦略的に対外発信を行うための拠点として、先ずはロンドン、ロサンゼルス、サンパウロの3都市が選ばれました。世界中の少しでも多くの人々に向けて日本の魅力を発信することにより、日本への理解と共感を広げていくことを基本的な目的としています。

それぞれの国にはそれぞれの価値観や文化が存在します。日本という国を伝えるには、日本人のライフスタイルに必要な独特な価値観が存在するということを、先ず意識してもらうことが重要だと考えます。

海外の人々が一般的に想像している日本のイメージとは、一体どういったものなのでしょうか。それは和食か

も知れませんか、和風アートかも知れません。あるいは日本の地方で見られる美しい自然、もしくは洗練された都市や歴史的建造物かも知れません。この様な多くのイメージが漫然とある中で、世界に向けてどのように日本を表現すべきでしょうか。

自然との共生を常に意識しながら、独特な感性を磨きあげてきたのは日本文化の芸と言えます。大自然と人間が共存共生するという意味は、自然による脅威つまり災害を乗り越えるということであり、日本人は長い歴史の中でそれを実践してきています。そして「メイドイン・ジャパン」と世界から賞賛される高品質な技術は、強いこだわりをともなった繊細さ、まさしく日本人の感性そのものと言えると思います。

ジャパン・ハウスに来館される人々が、これまで知られていなかった多面的な日本を発見する、五感で日本を体験してもらう、そして驚き、感動、共感をしてもらうと同時に、日本についてもっと深く広く理解したいと思われる場所となることが、ジャパン・ハウスの本質的な役割です。

3都市ジャパン・ハウスの総合プロデューサーは原研哉氏、ジャパン・ハウス サンパウロの建築デザインは隈研吾<sup>くま</sup>さんが担当されました。

ジャパン・ハウス サンパウロは、カルドゾ政権で財務大臣を、その後主要国の大使を経験されたルーベンス・リクペロ氏が名誉館長を、そして私、ブラジル日系二世のアンジェラ・ヒラタが館長を務めています。

今ではジャパン・ハウス サンパウロのアイコン「顔」の役割を果たしている檜<sup>ひのき</sup>ファサード建築のために、岐阜県中島工務店の宮大工5名の方たちにブラジルへ来て頂きました。

岐阜県産のヒノキ素材を一度実際に組み立てテストした上で、それらを解体した総量6tのヒノキ素材をブラジルに輸送したのです。

グランド・オープン前のイベントとして実行した「フラワーメッセンジャー」は、世界で活躍する日本人フラワーアーティスト東 信さんによるプロ

デウスで、30日間かけて自転車に乗ったスタッフがサンパウロの色々な街角で、道行く人々に花をプレゼントして周るというアクションで、大変好評に終わりました。



ジャパン・ハウス外観—櫺ファサード

4月30日にグランド・オープン時のテープカットを実行、テメル大統領、麻生副総理に加えて、アルキミン サンパウロ州知事、ドリャ サンパウロ市長が参加して行われました。オープニング記念コンサートとして実施した坂本龍一さん、三宅純さんによる一般向け演奏会には15,000人の聴衆が参加しました。翌日の招待者向け演奏会には、フェルナンド・エンリケ・カルドーゾ元大統領をはじめとする著名人他405人が参加されました。

ジャパン・ハウス サンパウログランドオープニングの展示会は、「竹」展を実施しました。日本の歴史と文化に深く関わってきた竹を、アート作品や生活に用いられた用品を通じて紹介し、スタジオジブリによるアニメーション映画『かぐや姫の物語』を天井に映写し、来館者が畳の上であお向けになって見ることができるというユニークな企画を実施しました。最新の展示会は建築家藤本壮介氏による“Future of Future”という建築の未来に関するものです。



グランド・オープン時のテープカット（左からアルキミン サンパウロ州知事、テメル ブラジル大統領、麻生副総理兼財務大臣、ドリャ サンパウロ市長

オープン後2日目の週末の来館者は7,900人に達しました。当初は1日500～600人程度の来館者を予想していましたが、平日は2,000人、少ない時でも1,000～1,500人、週末は4,000～5,000人という数に達しています。年間累積15万人程度の来館者を期待していたところ、早くも6月9日に10万人を突破、8月20日には30万人、10月6日に50万人、翌2018年1月23日には60万人突破しました。

来館者へのアンケートを通じて、「日本による資源の使い方が印象的」が50%、「日本の美意識がよくわかる」48%、「再生可能資源の利用方法を学んだ」39%、「日本についてあまり考えたことがなかったが、興味が湧いた」14%、「もっと日本を知りたい」41%といった結果が出ています。

ジャパン・ハウス サンパウロのミッションには、日本とブラジル両国間のビジネス、文化、教育の交流を活発にし、深めるための交流企画の実施もあります。それは例えば展示会、レセプション・交流会、セミナー・ワークショップ、ポップアップストアと言った形で実施されていきます。こうしたミッションの追及は、ジャパン・ハウスをこれから5年、10年、100年と永続的に運営していくためにも必要となる大切な要因であると考えています。



「竹」展—左から中前隆博在サンパウロ日本国総領事（現 中南米局長）、ヒラタ館長、リカルド・ズニンガ在サンパウロ米国総領事

これから「企業間の交流を促す」「世界的なリーダーとの交流を促し、企業分野を推進させる」、「パートナーシップと知識で、業界の経済状況の回復を促す」、「文化要素の提供」、「市場拡大への貢献」、「人材を育てる」、「参加企業の国際的市場拡大推進」、これらについても計画性をもって実施していきます。

ビジネス交流の中で、具体的な素晴らしい例として沖縄の芭蕉布<sup>ばしょうふ</sup>があります。芭蕉布はバナナの幹を原料とした繊維ですが、ブラジルにはどこにいてもバナ

ナがあります。そしてバナナは、比較的貧しい地域により多く繁殖している、という特徴があります。私が芭蕉布に出会ったのは今から15年前のことですが、ブラジルでバナナが多く繁殖している地域にこの芭蕉布技術を伝えることにより、その地域の人たちが貧しさから抜け出すことができるのではないかと考えました。そうした縁もあり、ジャパン・ハウスプロジェクトに携わり始めて真っ先に訪れたのが、沖縄芭蕉布を今日も守っておられる人間国宝の平良敏子さんです。今日の繊維業界では、この芭蕉布をアーティストショー的な扱いではなく、堅実なビジネスのために工業化する方向にもっていこうという動きがあります。ジャパン・ハウス サンパウロで芭蕉布を展示して以来、ブラジルのSENAI（職業訓練機関）、SEBRAE（中小企業支援機関）といった非営利機関から、沖縄の平良さんの元に人材を派遣して、技術を学ばせたいという話が進んでいます。

次の例にTOK & STOCKがあります。TOK & STOCKは日本の無印良品に似た生活用品を扱うブラジル大手ブランドです。このTOK & STOCKの商品開発において、日本人デザイナーを参加させ、コラボレーションさせる可能性を協議しています。

ジャパン・ハウス サンパウロ館内で展開している独立採算事業は、日本的スイーツを販売する“Imi Café”、ブラジルには存在していない高品質な風呂敷を販売する“Furoshiki”、日本酒や良質な食材を販売する“Shim”があります。そして日本食レストラン“JUNJI SAKAMOTO”ではブラジル人には新鮮である「定食」を提供し、好評を得ています。ポップアップストアには、無印良品、BEAMS JAPANが参加していく予定です。

「おもてなし」は、日本におけるおもてなしのコピーではなく、ブラジルの「ホスピタリティー」を掛け合わせる形で伝えていくことを実践しています。

最後にジャパン・ハウスは将来に向けてどういう方向に向かっていくべきかという私の考えを披露したいと思います。ジャパン・ハウスは日本の文化と歴史を軸としながらイノベーションにあふれ、来館者がポジティブな気持ちになり、さらに大きなものを生み出していく場所になっていくことが大切だと考えています。

ジャパン・ハウスは日本とブラジルの間にいくつもの重要な橋をかけ、共に継続性をもって持続的に成長し続けることができるように、互いの暮らしや文化を



来館された野口在サンパウロ総領事、丸山外務報道官、Rubens Ricupero大使（ジャパン・ハウス名誉館長）、ヒラタ館長

理解し合い、新しいアイデアを生み出し、互いを豊かにする拠点となっていかなければならないことを自覚しています。決して一時的なお祭りの場や、賑やかな単なるテーマパークになってはならないことをしっかりと認識しています。

ブラジルの日系社会が長年にわたって築いてきた日本とブラジルの絆を尊びつつ、新たな感性で両国の関係性をさらに広げ、強固なものとして行く拠点がジャパン・ハウスです。両国の人と人の結びつきを強くするとともに、ビジネスシーンにおいても両国の平和と調和をベースにさらなる発展を目指します。

ジャパン・ハウス サンパウロを拠点として、ブラジルから南米各国へ、そして世界へ展開していくという新たな可能性を引き出し、次世代、未来とつなげていくことも目指したい考えです。

日本人は季節の移ろいを五感で感じながら、四季に寄り添うように暮らしや文化といった営みを育んできました。それをベースに食や美術、文学、音楽、ファッション、建築などに見られる日本独特の文化を創ってきました。日本人の感性や物の考え方、そしていわゆる日本人らしさは、変化に富んだ四季が生み出す自然の風土の中で育まれてきたものと確信できます。日本の四季を事業展開のテーマとし、伝統的かつイノベティブなプレゼンテーションを行いながらジャパン・ハウスを育てていき、そして世界とつながっていくことを目標とします。

安倍総理大臣が2014年の中南米訪問の際にサンパウロで行われたスピーチの中で掲げられた「発展を共に、主導力を共に、啓発を共に」をしっかりと咀嚼して、地に足のついた息の長いジャパン・ハウスになるよう努力していくことを約束し、みなさんとも連携をこころより望み、その重要性をJAPAN HOUSE SÃO



PAULO のチームと共に受け止め一丸となって前進して行く所存です。

開館から 10 ヶ月でジャパン・ハウス サンパウロはすでに市内屈指の人気スポットとなっています。現在 7 番目の展示会が開催中であり、これまでの来館者数は延べ 69.7 万人に達し、また講演、セミナー等の開催によって 2 国間の交流をより一層深めています。

世の中が認める事業となっている世界初のジャパン・ハウスをこの地で開館できたことを私たちは誇りに思います。来館者を常に圧倒させるような「オールジャパン」を発信し続けるためには常にアンテナを張り続けることが重要です。

このような好調な業績を踏まえ、この先ジャパン・ハウスが持続可能なプロジェクトであるためにも、私達は重大な責任を担っていることを実感いたしております。その未来のためにも二国間のビジネスを促進し、新たな革新へ向かって共に進むビジネスパートナーの

マッチングを行う場となることを目指しています。さらに、メンバーシップ・プログラムもまたこの取組の持続可能性を向上する上で重要なプロジェクトであり、日本・ブラジル両国の企業の新たなネットワークを構築することで新たなビジネス、パートナーシップへと発展する可能性が十分にあります。

最後に、日本政府が打ち出すジャパン・ハウスという取り組みは、平和な世界を追い求める上で重要な役割を果たしていることを強調したいと思います。私たちは日本と共に調和に満ちた豊かな世界を築いていく所存です。世界に貢献するジャパン・ハウスをこれから永く存続させ 10 周年、50 周年、100 周年を祝い続けるようにしていく、それは私たちと皆さんの共通の課題と確信しています。

(Angera Tamiko Hirata JAPAN HOUSE SÃO PAULO 館長兼事務局長)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『カヌードスの乱 — 19 世紀ブラジルにおける宗教共同体』

住江 淳司 春風社

2017 年 12 月 265 頁 3,200 円＋税 ISBN978-4-86110-571-5

ブラジルが 1822 年に独立し 89 年に共和制に移行して間もない、政治的にも経済的にも未だ不安定な 1896 年から 97 年にかけて、東北地方の奥地で起きた宗教共同体と州・共和国軍との戦闘—カヌードスの乱といわれるブラジル史上に遺る内乱事件を、「千年王国運動」と称したメシアニズムの系譜と発展、この民衆運動と教会・地方寡頭政治、連邦制から中央集権体制への移行期にあった国家との対立の背景と経緯を辿っている。

宗教指導者アントニオ・コンセリエイロに率いられた救世主運動が、奴隷制廃止後も大地所有者の搾取や早魃に苦しむ貧しい農民や大衆を惹き付け、彼を救世主と慕って集まってきた集住地「カヌードス共同体」は規模を拡大してきた。その新教会建設資材の引き渡しのトラブルに対する市と地方判事の対応のまずさから生じた警察隊と共同体との小競り合いが次第にエスカートし、当初は共和国に対する叛乱ではまっぴらなかったが、その後 3 度にわたる討伐派遣軍が多大な損害を出して敗北し面子をつぶされた共和国がついに 1897 年に 11,000 人以上の大軍を投入しその半数 5,000 人の死傷者を出して、25,000 人と言われたカヌードス軍を全員殺害することで壊滅させるまで、内戦といってよい一大事件となった。

本書は日本では初めての本格的なカヌードス戦争の研究書として、コンセリエイロを反カトリック的狂信者、共和制への反逆者とするブラジルでの伝統的な見方を否定し、「千年王国運動」を危険視した当時のブラジル支配層側の歪みの反映だったと見てその原因を焙り出そうとしている。ちなみにペルーのノーベル文学賞作家バルガス＝ジョサは 1981 年に、これを題材とした小説『世界終末戦争』を発表している(邦訳は新潮社刊 旦敬介訳 1988 年)。

(桜井 敏浩)